

# 平昌五輪を目指す 注目のアスリート

盛岡広域スポーツコミッションが推進する、オリンピック選手  
の輩出を目指す「エイト・オリンピックズ・プロジェクト」。シ  
リーズ第4回目となる今回は、間近に迫った平昌オリンピック  
クを目指す選手が秘める大舞台への思いを紹介する。



永井秀昭のスキーヤーとしてのキャリア  
は必ずしも順風満帆ではなかった。全国中  
学校大会、ジュニアオリンピックで優勝し、  
大学卒業後も競技を続ける意向だったが、

スキー・コンバインド

## 迷うことなくシンプルに。 前回逃したメダルを狙う



# 永井秀昭

永井秀昭 [ながい・ひであき]

1983年9月5日生まれ。八幡平市出身。170cm。小学1年生から競技をスタート。  
盛岡南高校から早稲田大学に進学し、現在は岐阜日野自動車に所属。2012年  
にワールドカップ初出場。ソチオリンピックでは3種目に出場し、団体で5位入賞。  
兄の陽一、弟の健弘もノルディック複合の選手。



アイスホッケー

# 小西あかね

小西あかね [こにし・あかね]

1995年8月14日生まれ。北海道出身。166cm。中学時代から日本代表合宿に  
参加。駒川市立東高校3年時にソチオリンピックを経験し、最終戦でデビュー。  
ポジションはGK。高校卒業後、盛岡市に本社を置く久慈設計の東京支社に勤  
務しながら、強豪・SEIBUプリンスラビッツに所属しリーグ戦を戦っている。

## 心も体も準備は万全。 安定した守りで貢献したい

すし、クロスカントリーでも終盤まで力を温  
存させてラストスパートで爆発させられる  
ようにトレーニングをしています。競技するう  
えでは迷いというのが一番の敵であり、怖い  
部分なので、シンプルにやるべきことを消化  
することが大事になると思います。そして、  
いよいよ11月下旬からW杯が開幕し新たな  
シーズンが始まります。まずはオリンピック  
の代表に選ばれるために開幕からスタート  
ダッシュをかけ、選出されるようにアピール  
していきます。そして代表権を獲得して、4  
年前のオリンピックで味わった悔しい苦い経  
験を生かし、前回届かなかったメダルを持  
ち帰れるように全力を尽くします」

「まさかソチに行けるとは思っていなかつ  
たんです。中学の時から代表合宿に呼んで  
もらっていましたけど、試合に出たことがな  
かったのもありますし。デビューのときは相  
当緊張していて何も覚えてないくらいです」  
アイスホッケー女子日本代表「スマイル  
ジャパン」のGK小西あかねは、ソチオリ  
ンピックのドイツとの最終戦に途中出場。初  
めての日本代表での試合となったが無失点  
で終えられたことは自信につながっただけ  
でなく、もっとうまくなりたいという強い向  
上心にも火をつけた。  
岩手に縁のなかった小西は、高校卒業後

複合の選手をとる実業団は少なく、地元  
に戻り決断をした。

永井は家族の支援を受けながらトレニ  
ングを続けた。努力が結実したのは200  
7年。日本代表として世界選手権出場を勝  
ち取ったが、そこで感じたのは世界との大き  
な差。さらに追い打ちをかけるように体調  
不良に陥り、決まりかけていた就職の話も  
流れてしまった。

再度、競技人生の岐路に立たされた永井  
は、きふ清流国体の強化選手として岐阜県  
からオファーを受け、2008年1月に岐  
阜日野自動車との契約に至った。そして、こ  
のオファーが選手としての大きな成長にも  
つながる出会いを生み出した。

「中央大学でコーチをしていた元オリン  
ピック選手の森敏さんに声をかけてもらい  
ました。伸び悩んでいた時期だったんです  
が、指導していただく中で『この人に教えて  
もらえば成長できる』と感じたんです。競  
技との向き合い方など多くの言葉をいただ  
きました」

自身のためなめ努力と信念。そして家族  
の支援、声をかけてくれた岐阜日野自動車、  
そして森コーチとの出会いによって力を磨い  
た永井は遂にソチオリンピックの日本代表  
に選出され、団体5位の成績を残した。し  
かし、永井には大きな後悔があった。

「普段の大会と同じように過ごそうと意  
識していたんですが、その時点ですでに普  
通ではないんですね。雰囲気も呑まれて  
いた。やるべきことに100%集中しきれな  
かったことが目指す結果を残せなかった要  
因だと思います」

その後はジャンプフォームの修正に取り  
組んだ。徐々になじんできており、それが昨  
季からの好成績にもつながっている。最後に  
2度目のオリンピックとなる平昌への思いを  
語った。

「ジャンプでは助走路で力をロスしないよ  
うな修正をソチの後からずっと続けていま

はJOCが行っているトップアスリート就職  
活動支援を受けて、久慈設計に就職すると  
同時にアイスホッケー強豪SEIBUプリ  
ンスラビッツに入団。さあここからという矢  
先、練習中に半月板を損傷してしまっ  
た。「正直、辞めようかなと思うことも少しあ  
りました。筋力が落ちていく中で不安が常  
にあつて……」

ほとんどの選手がけがの経験がある中、  
小西はけがと縁がなく、これが初めての大き  
きな負傷。離脱となったこともショックに拍  
車をかけた。しかし、彼女は気持ちを奮い  
立たせ、復帰を目指した。原動力となったの  
は支えてくれた両親であり、受け入れてく  
れた久慈設計の存在。「この程度のことです  
折れていたら親にも会社にも申し訳が立たな  
い」と、過酷なリハビリに打ち込み、タフな  
精神力を鍛えた。

翌春の復帰後は精神的に練習に打ち込  
み、今年に入ると世界選手権D1A（2部相  
当）のデンマーク戦でフル出場を果たし完封  
勝利に貢献。正GKの壁は高いものの、信頼  
できる控えGKとして存在感を放っている。  
「正GKを奪うとかそういう気持ちではな  
く、チームとして良いパフォーマンスを出す  
ことを考えています。これまでは攻められ  
ているときの不安が仲間に伝わってしまっ  
て、いいプレーができなかった。でも、経験  
していくうちに舞台や試合に慣れてきたの  
で、前に比べると安定感は増したかなと思  
います」

22歳で迎える2度目のオリンピック。ソチ  
での経験をどう生かし、どこを目標に小西  
は世界に挑むのか。  
「ソチの時は心も体も準備不足でしたけ  
ど平昌は自ら目指してやってきましたので、  
万全の状態だと思っています。スマイル  
ジャパンとしてはメダルを目指したいです  
し、試合に出たら安定した守りで貢献した  
いです。私は考え過ぎちゃうタイプなので、  
素に近い状態で行けたらいいと思います」





### 平昌五輪を目指す 注目のアスリート

今年1月のインカレで準優勝に輝いた佐藤洸彬は岩手大学の4年生。佐藤は昨季の成績が評価され、日本スケート連盟の強化選手Aに選ばれると同時に、11月に開催されるグランプリシリーズNHK杯への出場権を手にした。表現力に定評のあった佐藤だが、好成績の裏には4回転ジャンプ成功の影響が大きかった。

「インカレやバヴァリアンオープンで2位になったのは、4回転ジャンプの成功が大きいのと思います。1月のインカレで初めて大会での（回転数が十分に足りているという）クリン判定をもらえたし、着氷も安定できています。これは大きな自信になりました」

フィギュアスケート



取り組み始めたのは約2年前。トリプルアクセルとも全く違うため、最初はタイミングやリズムを探すのに苦心したと話す。回数を重ねる中で体に植え付け、つ



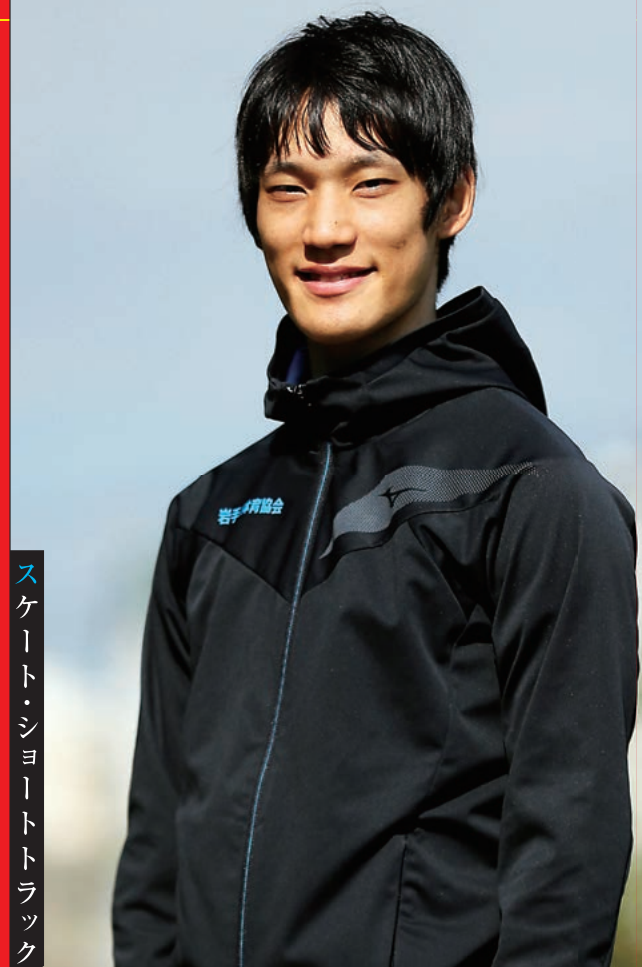
### 4回転と表現力を武器に 憧れの舞台を目指す

# 佐藤洸彬

佐藤洸彬 [さとう・ひろあき]

1995年12月6日生まれ。盛岡市出身。165cm。2人の姉の影響で、5歳からスケートを始める。城西中学校、盛岡中央高校を卒業し、現在は岩手大学の4年生。2016年は東日本選手権優勝、2017年はインカレ2位、バヴァリアンオープン2位など国内外の大会で好成績を残す。11月にはグランプリシリーズNHK杯初出場を控える。

### そこには理由も理屈もない オリンピックは自分のすべて



スケート・ショートトラック

# 村竹啓恒

村竹啓恒 [むらたけ・ひろのぶ]

1990年8月28日生まれ。神奈川県出身。171cm。小学生時、神奈川県の自宅近くのリンクで活動するスケートクラブに入り競技をスタート。神奈川大学卒業後、希望郷いわて国体の強化指定選手として来県。2016年の希望郷いわて国体で優勝、同年の全日本ショートトラック距離別選手権大会1000m2位、2017年の全日本ショートトラック選手権大会1000m4位。岩手県体育協会所属。

たという気持ちでした。見ず知らずの自分を受け入れてくれた皆さんに喜んでもらえたことが何よりもうれしかったです」村竹は当時を懐かしむように振り返る。

2013年のソチオリンピックの代表選考会ではレースに敗れ、憧れの場所にはあと一歩届かなかった。レースを回想し、その重い口を開く。

「悔しい気持ちしかなかったです」ゆっくりと時間をかけ、かみしめるように思いを言葉にする。彼の心中を察するに余りある一言。あるいは表現するのはその言葉以外になかったと言ってもいい。すべてをかけるとはこういうことなのだ、と

思い知らされる。それほどまでに彼のオリンピックに対する思いは強く大きい。

現在はナショナルチームで国内外を転々としながらトレーニングを積み、大会に参加しているが、コンディション維持が難しい中で、これまで以上に体の管理を徹底するようになった。トレーナーとも密なコミュニケーションを図り、イメージと動きの連動を徹底している。すべてはオリンピックに出て結果を残すためだ。その成否を決するのが12月16日から行われる全日本ショートトラックスピードスケート選手権大会である。

「オリンピックは自分のすべて。そこには理由も理屈もないですよね。子どもの

いに大きな武器を習得した。現在、世界基準の男子フィギュアでは4回転ジャンプは必須ともいえるジャンプ。その意味で同じ土俵に立てたことはポイントの上積みだけでなく、精神面でも大きなプラスとなっただけだ。

佐藤は今季、ショートプログラムではシルクドソレイユの「トリーテム」を採用。滑らかなスケートディングの中でいろいろな生き物が登場し、その特性や躍動感を体の動きで伝える、観ている非常に楽しい演技だ。また、フリースケーティングでは「セビリアの理髪師」というオペラの楽曲に合わせて華麗に演技し、主人公フィガロをリンク上に降臨させる。

採用して2シーズン目。非常に成熟し完成度を高めたプログラムを携えて、昔からの憧れであったオリンピックの大舞台に立つための闘いに臨む。

「今、重点を置いているのは4回転ジャンプの成功率とスケートディングの部分をさらに伸ばすことですね。正直、オリンピックの舞台は想像できないですけど、自分が良い演技をすれば、そこに立つチャンスがあるという意識は持っています。まずはNHK杯で出し切る。そしてオリンピックの選考会となる全日本選手権で自分の最大限を発揮することだけを考えています」

NHK杯はこれまでのキャリアの中でも最大クラスの注目度を誇る大会となる。大舞台での経験を力に変え、岩手が生んだフィギュアの申し子は勝負の冬に挑む。

2016年の希望郷いわて国体冬季大会。村竹啓恒は初日のショートトラック成年男子1000mで優勝し、その後の入賞ラッシュに火をつけた。

「国体では初優勝でしたが、ほっとし

ころから抱いていた、ただただそこに行きたい、そこで一番になりたい。そういう意識が今も自分を突き動かしています。今はまずその舞台に立つために、選考会でベストなレースをする。自分はスケートで育ちました。人間形成、人間関係、今までの自分そのものです。それを続けながら応援されるっていうのは本当に大変なことだし、奇跡です。恵まれています。幸せなことです」

並々ならぬ決意と己のすべてを賭け、村竹は運命のレースに臨む。

### 岩手ゆかりの 有力選手たち



渡部知也 [わたなべ・ともや]

(株)シリウスEHC所属



阿部真衣 [あべ・まい]

(株)コスモ通信システム所属